

〔赤染衛門集〕くらまにまうでしに、きぶねにみてぐらたてまつらせしほどに、いとくろうなりし

かば、

ともすらんかたゞにみえずくらま山きぶねの宮にとまりゑぬべし。

〔謡曲〕鞍馬天狗

シテ詞 加様に候者は、鞍馬の奥僧正が谷に住居する客僧にて候、扱も當山にをひて、花見の由承及候間、立越よそながら梢をも詠ばやと存候、狂言是は鞍馬の御寺に仕へ申者にて候、扱も當山にをひて毎年花見の御座候、殊に當年は一段と見事にて候、去間東谷へ唯今ふみを持て參候、いかに案内申候、西谷より御使に參りて候、是に文の御座候御覽候へ、○中 上歌同 花さかば告んといひし山里のゝ、使は來り馬に鞍、くらまのやまの雲珠櫻、手折枝折を亥るべにて、奥も迷はじ咲つゞく、木陰になみゐていざく、花をながめん。

〔書言字考節用集一乾坤〕吉野山ヨシノノヤマ又作芳野郡

〔和漢三才圖會大和〕吉野郡

吉野山 一名金峯山。又名國冉本朝七高山之内、其土皆黃金也、因稱金御嶽。○中 凡南北山深遠未知里程、東西不過三里、

〔書言字考節用集二乾坤〕金峯山キンブナサン城和州吉野郡、義楚日本國都

〔伊呂波字類抄見諸寺〕金峯山キンブナサン大和國吉野郡、七高山其一也、

〔書言字考節用集二乾坤〕御嶽ミタケ和州土俗、斥金峯山曰金御嶽、

〔伊呂波字類抄加諸社〕金峯カムイニチ同吉野郡、月次相嘗新嘗、

〔孝經樓漫筆二釋迦ヶ嶽〕金峯山キンブナサンより釋迦が嶽まで十三里、釋迦が嶽より神山まで六里半ありとなり、俗には金峯山を大峯とこゝろへたれど、そは誤なり、金峯山は御だけにて、大みねと